
魔王の娘と孤高の兵士

ガバメント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の娘と孤高の兵士

【Nコード】

N1687S

【作者名】

ガバメント

【あらすじ】

複数の国によって作られた勇者率いる連合国と魔王率いるサラビエラ王国の戦争は開始から1年ほどで決着がつこうとしていた。最終決戦は魔王の城で行われ、今にも城は陥落しそうになっている。そんな中、魔王から逃げるように言われた魔王の娘ノエルとシャルロットは護衛を連れて城から脱出する。

そのあと、城から離れた森に神によって異世界の兵士ユートが呼び出された。

神の使いだという自称オペレーターからビデオチャットを通してこ

こが異世界だと告げられるが信じられないユート。

そんなユートと魔王の娘2人が勇者から逃げ、安住の地を探す物語。

異世界、主人公最強系ですが、どちらかといえば装備のほうが凶悪かもしれません。

また、主人公は勇者を打ち倒すために戦いを挑むのではなく必要がなければ基本的に戦おうとしません。

不定期になると思いますがどうぞよろしく願います。

始まるの時（前書き）

作者は状況説明が苦手です。

また、無理に詰め込みすぎなところがあるかもしれません。
それでも別に気にしないという方はどうぞ。

始まりの時

魔王の城

「正門、突破されました！敵はなおも進軍中。」

玉座の間に伝令が報告を告げに来た。玉座の間の外からは、剣戟の音や悲鳴、怒声が響いている。

「どうでしょう？魔王様。」

側近の一人が豪華な装飾の施された玉座に座っている男に問いかける。男は魔王と呼ばれた割には邪悪そうな感じはせず、しかも精悍な顔をしている。

見た目もほとんど人間と変わらない。ただ決定的に違っているところが二つほどあった。

一つは、体からにじみ出ている強大な魔力。

もう一つは、瞳の色が紫色という点だ。

普通の人間や魔人ならば肉眼で見えるほどの魔力を持つことはできない。それに瞳の色も人間は明るい緑や青が大半を占めており、魔人もたいていは暗い色の黒などが多い。紫という色は魔王の血筋に連なるものだけが持つ特殊な色なのだ。

「西の門で防衛している兵の3分の2を迎撃に当たらせよ。」

魔王は深刻な顔をして、指示を出す。

「っ！？で、ですがそうすると西の門の守りが」

「いいから私の指示通りにせよ！」

「りよ、了解しました。」

命令を受けた側近が伝令を走らせる。

「それから……娘たちをここへ。」

10分後

「そんな！それでは、お父様はどうなさるのですか！？」

玉座の間に少女の声が響き渡る。先ほどまで十数人いた側近はおらず、魔王と二人の少女だけがいた。

その3人の共通点は二つ。黒い髪と紫の瞳。

「私はここに残り、勇者の相手をする。奴の相手ができるのは私だけだからな。」

魔王は、先ほどまでと違って鎧を身に着けている。誰が見ても一目で戦闘用だとわかるほどに禍々しい作りの鎧だ。そして、その瞳は自らの娘たちに向けられていた。

「何も、一人で相手をする必要はないでしょう。私はともかく、シヤルならお父様の」

「ノエル！！！」

魔王の怒声に二人の体がビクリと震える。

「お前たち二人がいたところで戦況は変わらん。たとえ、勇者をお前たちと倒したところで数の暴力には勝てん。時期に私たちも殺される。利権を求めて戦争を仕掛けてきた奴らだ。たとえ捕らえられたとしても何をされるかわからん。それに……………」

魔王はいったん言葉を切り、二人の顔をじつくりと見つめた。

「父として、娘を守りたいと思うのは当然のことだろう。……………話は終わりだ。一個小隊を付けるから城の脱出路から逃げるんだ。異論は認めん。」

始まりの時（後書き）

とりあえず、導入部分です。まだ、主人公とヒロインが出会ったのは先になりそうですが……。

読んでくれた方、ありがとうございます。

孤高の兵士

45分後、魔王の城から北西に約2200メートルの森、補給地点
ユートSIDE

「というわけで、あんたは異世界に飛ばされたってわけ。」

俺は今PC（ノートパソコン型）の画面に映っている男、というよりも少年とビデオチャットをしている。

この少年は15歳くらいに見える。

ぼさぼさの黒い髪に、黒い瞳。いたずらっ子のような笑みを浮かべていて、だぼだぼのジャージを着ている。

「つまりお前は、作戦のために用意された補給地点で寝ていた俺『ユート・ケーニツヒ』は、その補給地点ごと異世界に飛ばされた。しかも、この世界はある国と複数の国からなる連合軍が戦争中。ここから南東に1キロほど行ったところにある城では今にも決着がつきそうになっていると。それにお前は俺をサポートするために神から派遣されたオペレーターだって。そんなこと言われて信じられるわけないだろ。」

俺の状況はしゃべった通りだ。

軍から命令を受け、敵基地に一人で突撃。無事に主要目標を破壊し、次の任務である重要人物の拉致のための武器や弾薬などの用意された補給地点に移動。そこにあった移動用のヘリの中で寝ていた俺は緊急用の通信を意味するアラームで飛び起きた。急いで連絡用のPCを起動させ回線を開いたらこいつが笑いながら突拍子もないことを語りだしたというわけだ。

「そうだよね。信じられるわけじゃないよね。でも、事実だから。」

自称オペレーターの男はそれまではにやにやと笑っていたのに、いきなり真剣な表情で、俺を見つめてきた。

「真実が知りたいのなら双眼鏡か狙撃銃のスコープを持って、南東の方角に行ってきたよ。兵士たちの使っている武器を見れば納得するさ。おもしろいものも見られるだろうしね」

少年の言葉が頭の片隅に引っかった。

俺がこの少年の言葉を否定していた理由はいろいろある。常識的に考えてありえないというのが一番大きいのだが、次に大きな割合を占めているのが『音』だ。

仮に、戦闘が行われていたとしてもたかが2キロほどしか離れていないのだ。戦車砲にしろ、追撃砲にしろ、何か『音』が聞こえてくるはずである。だがここら辺一帯は静かだ。さっきも鳥の鳴き声がこだましていた。ここが戦場の近くなら鳥の鳴き声など聞こえるはずがない。歩兵だけの可能性は低いだろう。戦場は城で、しかも決着がつきそうということなら出し惜しみするはずがない。すべての兵器を投入するはずだ。

そう考えて、男の言葉を否定していた。

だが、男の言うとおりここが異世界ならば武器と一緒にとは限らないのではないか？

銃以外の……たとえば、剣や弓のような昔の武器の可能性もある。推測するだけではちが明かない。

確かめてみるか。

機内に転がっていた双眼鏡をウエストポーチの中に入れる。椅子の上に置いていた拳銃『デザートイーグル50AE』をホルスターに入れ、腰に下げる。そして、弾薬箱からデザートイーグルのマガジ

ンも6つウエストポーチの中に入れる。一つのマガジンに弾は7発ずつ、銃自体に7+1発入っている。合計50発だ。あと、接近戦用にサバイバルナイフを腰に装着する。

俺は基本的に野戦服を着ない。市販されているワイシャツに暗めのズボン。そのうえから、オーダーメイドの黒を基調としたコートを着るのが俺の服装だ。このコートは軍服にデザインを似せている。だが、軍服の数倍動きやすく作ってある。ボタンは目立たないように黒いものを使っている。

別にこの服装はファッションを意識しているわけではない。敵基地などの潜入ミッションの時や、夜間の視認度を下げるためである。

だが、昼間は逆に視認度が上がってしまう。しかし、基本的に昼間は敵に見つかる前にこちらが見つけて殺るので問題がないのだ。危ない目にあつたことも1度や2度ではないが。あと俺が明るい色をいやだということもある。

この服は動きやすさを優先させているのでマガジンをいれるための場所があまりない。なので、軽装備の時はウエストポーチを数個。重装備の時はそれプラス、バックパックを使う。水や食料は基本現地調達している。理由はそんなスペースがあるならマガジンを入れようと思ってしまうからだ。さすがに砂漠では無理だったが。

今回はただの偵察だ。なら、ウエストポーチひとつで十分だ。ウエストポーチを身に着け、PCの電源を落とそうと近づく。いつ充電できるかわからないのだから節電したほうがいいという判断だが、その考えは自称オペレーターの声によって阻まれてしまう。

「あつ、行くの？つて、待った、待った！このPCは切らないで！」

「なぜだ？PCのバッテリーだって無限ってわけじゃな

」

「大丈夫だから！そのPCは連絡用に絶対にバッテリーが無くならないようになってるから！バッテリー残量のところをみればわかるよ。」

バッテリー残量？

疑問に思いアイコンに目をやるとおかしなものが目に飛び込んできた。

普通、バッテリー残量を表すアイコンは電池の形をしているはずだった。だが、俺の目に飛び込んできたのは無限を表す『∞』だった。

「ふふん。すごいでしょ。神からの使いつていうのは伊達じゃ

」

ボタン。

面倒になったので、PCを閉じた。バッテリーが本当になくならないのかどうかはわからないが、いつまでもあいつに取り合っている必要はない。電源を落としたわけじゃないし別にいいだろう。

電源を切らないでくれと言っていたことは少し気にかかったが俺はヘリを離れ、南東の方角へ向かった。

孤高の兵士（後書き）

今回出てきたユートが主人公です。

自称オペレーターの彼はユートの悪友的存在？になる予定。名前の公開は結構後になるかもしれませんが。

脱出（前書き）

ちよつと書き方変えました。

脱出

数分後

300メートルほど南東に歩くと森を抜けた。

どうやらあの自称オペレーターが言っていた城は窪地の中心にある小さな丘の上に建てられていたらしい。ちなみにこの森は窪地の周りにある高台の一つにあった。300メートルしか進んでいないので距離はまだ遠いがある程度は肉眼でも確認できた。城を囲むように黒いものがうごめいている。

「どうやらあいつは本当のことを言っていたようだな。」

望遠鏡をウエストポーチから取出し城をうかがう。

なんというか、予想通りだった。城があり、人が群がっている時点であいつが言っていた異世界云々の話は一応信じた。じゃなきゃ、銃を使わずに剣で殺しあっている場面なんかに出会はずない。

「かなりの数だな。軽く見積もっても15万人は下らない。」

とはいっても両軍合わせた数だ。どうやら、城を攻めているほうが有利らしい。

双眼鏡から目を話し、戦場の全体を見る。これ以上情報は集められないだろう。そう思い双眼鏡をウエストポーチに入れようとすると戦場に光があふれ、次の瞬間轟音が鳴り響き地面が揺れた。

「なっ!?!」

思わず声が漏れてしまう。城の中核部分、すなわち王の間がありそうな部分が吹き飛んでいた。あれは……いったい？

同時刻、城から北北西へ約1970メートル地点、脱出路出口付近
ノエルSIDE

「そろそろ出口付近です。足元に注意してください、姫様。」

「はい。お気づかいありがとうございます。」

私と妹のシャルロットはお父様の用意してくださった40人ほどの近衛兵たちとともに地下にある迷路のような城からの脱出路をひたすらに歩き続けてきました。どうやらそれももうそろそろ終わりのようで、道の先にかすかな光が見えてきました。

「あ！光が見えてきたよ、お姉ちゃん。」

妹のシャルロットが私の服の裾を引っ張りながら、出口のほうを指さしています。

先ほどまでは元気がなかったのに出口が近いとわかって元気を取り戻したようです。

「ええ、そうね。もうすぐ外に出られるわ。」

「もうくたくただよ。明かりは松明の光しかないし、じめじめしてるし、歩きづらいし。」

一気に不満を言い始めたシャルロットの言葉を聞いて、私も周りの兵士たちも皆苦笑しました。

少しして、私たちは日の光を浴びることができました。どうやら少し離れたところにある森の開けた場所のようでした。

「これから私たちはどうするのでしょうか？」

私の質問に近くにいたこの小隊の隊長さんが答えてくれました。

「はっ！我々はここから北にあるモルティスの町へ行き体勢を立て直すことになっています。ですが距離がありますので2日から3日はかかるかと。」

「そうですか。ありがとうございます。」

「今、何人が周囲の偵察をさせているのもう少しした。」

「ぐああああああああああ」

突然大きな悲鳴、というより断末魔が響き渡りました。

それを聞いた瞬間、隊長さんの顔に焦りが浮かんだような気がしました。

「まずい！もしかしたら敵に囲まれたのかもしれん。総員、姫様の周りに。」

ドサッ。

何か投げられたような音が聞こえ、私たちはそちらを見ました。其処には先ほど偵察に行った兵士たちの死骸が複数置かれています。

そして、その隣には身長が2・5メートルはありそうな巨漢が立っていました。

「ふう。やっとお出ました。退屈しちゃったぜ。」

脱出（後書き）

主人公の視点はこの話は書きやすいのに、ほかの登場人物での視点は難しいです。

待ち伏せと出会い

「ふう。やっとお出ました。退屈しちまったぜ。」

巨漢は腕をぐるぐると回しながら首を左右に振っています。

「や、奴は、『戦狂いのクラドギア』！何故こんなところに！？」

兵士の一人が狼狽して独白しています。私も詳しくは知りませんがクラドギアとは素手で敵を何人もなぶり殺しにしたという連合軍の將軍の名だったはずです。

「何故って、聞かれりや答えるが。あそこにいる魔王の娘を捕まえるためさ。あの勇者殿はどうやらその二人がほしいらしくてな。今のうちに恩を売っておくためにここで張り込んでたってわけだ。」

「な！？脱出路の出口は秘密のはずで…。」

「あーもう。うるせえんだよ。ザコは死んでな。」

言葉をいい終わらないうちに巨漢：クラドギアは右手をあげました。同時に何十人もの弓兵が四方から現れました。

何回も風切り音が聞こえ、気づいた時にはあれだけいた近衛兵が全員バタバタと倒れていくところでした。

「お姉ちゃん！」

驚き、恐怖しながら固まっていると後ろから抱きついてくる私よりも小柄な体。シャルロットでした。どうやら敵の弓兵は近衛兵たち

だけを狙ったようです。

「さてと、邪魔者もいなくなったしとつと連れて行くかな。」

言い終わるとクラドギアはゆっくりとこちらに近づいてきました。

「こ、こないてください!」

勇気を振り絞って、大声をあげましたがクラドギアは一向に歩みを止めようとはせずに、口元にうつすらと笑みを浮かべました。

「別に殺そうってわけじゃねーんだよ。ただ縄でぐるぐる巻きにして勇者殿のところに連れてただけだからよ。」

「お父さんが知ったらただじゃ」

「がはははははははは。」

「きゃあ!？」

シャルロットが言った言葉を聞いた瞬間、クラドギアは笑い出しました。

「ははははは……ゲホッ、ゲホ。なんだ、お前らしらねーのか。」

「な、何のことよ!？」

クラドギアはシャルロットの問いかけに対してニヤリと笑うとうれしそうな表情で口を開きました。

「てめーらのお父さんとやらはついさつき勇者殿に打ち倒されたぜ。まあ、勇者殿も大けがを負ったって話だけだな。」

クラウドギアの言葉の後半部分は頭の中に入ってきてませんでした。

お父様が負けた……。

「そ、そんなこと、あるわけ……………ないもん。」

シャルロットの声をどこか遠くで聞いているような感覚。

「がっはっはっは。そりゃあ信じたくねーわな。だがな、嬢ちゃん事実なんだよ！変わりようのないな。」

私たち姉妹に厳しくも優しくかったお父様。

シャルロットのわがままに苦笑しながらも、付き合ってたあげていたお父様。

お父様との思い出が浮かんでは消えていく。

そうしている間にもクラウドギアは近づいてくる。

「いやあ、こないでええええええ。」

シャルロットの悲鳴が聞こえ、大きな手が私のほうへ伸びてくる。

もう、終わりなのでしょうね。

「ぐはあ。」

自分の人生を諦めようとしていた私の目の前でいきなりクラウドギアの巨体が吹き飛びました。

「大丈夫か？」

代わりに立っていたのは、真っ白い髪と肌。赤い瞳にきれいに整った顔立ち。黒いコートとズボンを着た身長180センチくらいの男の人でした。

数分前

コートSIDE

城で起こったあの爆発のことについてしばらくあの場所で考えていたのだが結局のところ、まったくわからなかった。

ここは異世界らしいし、俺の知らない兵器があるのかもしれない。剣や弓を使っているやつらがそんなものを持っている確率は低そうだけれど。

とりあえず、爆発のことはあの自称オペレーターに聞くことにした。あいつも一応悪い奴には見えなかったので信用しておくことにする。情報は選別する必要があるそうだが。

考え事をしながら歩いていると、実のなっている木があった。どうやらリンゴのようだった。ちょうどのが渴いていたので一つとって齧った。

甘いリングゴ特有の味が広がる。だが、元の世界とは違いもつと濃厚な味だった。瞬く間にそのリングゴを平らげもう一つ手に取る。そして、補給地点へ帰ろうと歩き始めた。歩きながらリングゴを齧る。周りは静かで、時折鳥のさえずりが聞こえる。

こういうのもいいな。ここ数か月は毎日うるさい戦場だった。銃弾が飛び交い爆音が鳴り響き敵や友軍の悲鳴が聞こえる。人が人生の大半を過ごすのは家だと聞いた覚えがある。そんなの嘘っぱちだ。俺が生きてきた中で一番過ごしているのは戦場だ。だが戦場といってもコロコロと場所が変わるからな。本当の意味で一番過ごしているのはあの輸送ヘリの中かもしれない。たしかここ数年同じ機体を使っていたはず。何はともあれ、こんなに心休まる時は本当に久しぶりだ。もう一口リングゴを齧る。

「いやあ、こないでええええええ。」

唐突にそれは聞こえた。若い、というより幼い感じのする悲鳴が右のほうから聞こえてきた。俺はとっさにその方向へ駆け出していた。そんなに遠くは無かったようですぐに悲鳴の上がったところまでたどり着くことができた。

森の開けた場所。

そこに、巨漢と2人の少女がいた。そして40人ほどの死体。周りの茂みにはまだ何十人かいそうだがそいつらは無視。とりあえず包囲を突き破って巨漢の顔に回し蹴りを食らわす。

「ぐはあ。」

そいつは見ずに少女2人を見る。

1人は腰まで届きそうなきれいな黒髪に、整ったやさしそうな顔立ち。いわゆる美人だ。身長は165センチほどだろうか。均整のとれたスタイルをしている。18歳くらいの少女。

もう1人は、その少女の後ろに隠れていた。黒髪をポニーテールにしている、まだ幼いながらも将来は美人になると思われる顔立ち。

身長は155センチくらい。年は15歳くらいだろう。

2人とも動きやすそうな服を着ていて紫の瞳をしている。顔立ちも似ているし、おそらく姉妹なのだろう。

「大丈夫か？」

待ち伏せと出会い（後書き）

登場人物の名前がいまいち思いつかないという問題が・・・。
精進
しなくては。

戦闘？

「大丈夫か？」

姉だと思われる少女に問いかける。

「えっ！？あの、はい。大丈夫です。」

びつくりしたような表情でこちらを見ている。まあ、普通の反応だな。

「そうか。ならいいさ。」

俺はまだそういつてまだ手に持っていたリンゴを齧る。

「しょ、將軍！？」

声が聞こえたほうに目をやると、茂みに隠れていた兵士たちが、俺が蹴った巨漢の周りに集まっている。

巨漢の顔はひどいものだった。鼻は折れ曲がり、鼻血がとめどなく流れ、前歯がすべて折れている。

「ぐ、ぐぞう。でめえ、なにもんだ。」

巨漢は立ち上がると俺のほうを見て言った。
正直、あんな顔でこっちを見ないでほしい。

「こんなところで一般人を襲おうとした獣になる名などない。」

こんな風に女の子を追いつめていたってことはそういうことだと思う。周りの死体は、この2人が追いつめられているのを見て助けようとしたんだろう。でも、返り討ちにあったと。

「まったく、なんでこんな屑がいるんだろうな。見ていただけでいやになる。」

「なんだど、貴様。」

そのままの勢いのまままでこちらに近づこうとしてきたのでホルスターからデザートイーグル50A Eを巨漢に向かって突きつける。

「最初で最後の警告だ。生きてお家へ帰りたいのならはお前ら全員視界から消えな！死にたいのなら相手してやるう。お前らごときなら10分もあれば事足りる！」

敵の数は43人。7発しか外せない。というわけではない。正確には7発余るのである。実際は貫通した弾に当たる敵もいるだろうからもつと余るだろう。敵との距離はたった5〜6メートル。ちなみにこの拳銃の有効射程は80メートル。その距離で狙うことと比べればこのくらいの距離ならば、俺にとっては息を吸うことくらいに簡単なことだ。

しかも敵は弓くらいしか目立った武器がなく、巨漢に至っては何も持っていない。弓は打つまでに時間がかかるし、素手で来られても最初に撃つちまえば問題ないだろう。

問題があるとすれば、後ろの二人を守りながらの戦いになるということだ。リロードの時にわずかな隙ができるし、接近戦に持ち込まれると困ったことになる。俺はともかく2人が危ない。

さすがに、こんな人数でいっぺんに襲いかかられたら2人を守り切れる自信はない。

「なんだど！俺のことを誰だどおもっでる。お前たち、やつちま

」

ダアアアアン。

巨漢の頭が吹き飛ぶ。誇張ではなく実際に。

このデザートイーグル50AEが発射するのは50口径弾、12.7ミリもの大きさを持つ銃弾だ。この50口径弾は狙撃銃用のものなら1.5キロ先にいる人間でも真つ二つにすることができるとえ拳銃用で種類が違つたとしてもたいして威力は違わない。

巨漢の答えは最後まで聞かずともわかつた。だから最後まで聞かずに奇襲を仕掛け、敵を混乱に叩き込み向かつてくる前に制圧する。という腹積もりだつたのだが、予想とは違つた、もとい違いすぎる展開にこちらのほうが固まつてしまった。

巨漢の頭が吹き飛んだ直後、敵兵士が全員武器を捨てて逃げだしたのだ。

「なんだ、あの魔法！？あんなの聞いたことないぞ。」

「しかも、詠唱すらしてなかつたぞ！」

「そんなこと、勇者や魔王にだつてできないはずじゃないか！？」

「化物だ。はやくにげろー！」

数秒後には、敵兵の姿はいなくなつており後に残つたものは捨てられた弓と矢筒、頭のない肉塊。それと矢が刺さつた死骸だけだつた。

「なんだ、あいつら？」

心配事が無くなったことで、おもわず独白してしまう。

それに、あいつら逃げていくときに魔法だ、なんだって言ってなかったか。

まあ、剣と弓なんか使っているくらいだ。銃なんてもの見たことないだろうし、魔法だと思ってても仕方ないんだろう。にしてはおかしな言葉があったような気がするが。

まあ、これも自称オペレーターに聞けばいいか。

戦闘？（後書き）

近頃自由な時間が取れません。できれば毎日投稿したいんですけど難しいかもしれません。

離陸と逃避（前書き）

遅くなりました・・・orz。

あと急いで書いたので文章のおかしいところがあるかも・・・。

離陸と逃避

「もう終わったぞ。安心していい。よく頑張ったな。」

俺は2人を安心させようと声をかけた。のだがあまり効果はなかったようで2人とも驚愕したような表情をしている。

「む、無詠唱魔法。……お父さんでもできなかったのに。」

小さいほうの少女がつぶやく。俺的には巨漢の頭が吹き飛んで驚愕していると思っていたのだが違うらしい。これは一度説明しておく必要があるそうだな。

「言うておくが、今は魔法なんかじゃないぞ。説明は省くけど。」

「魔法じゃないの（ないのですか）！？」

2人が大きな声を上げて疑問を口にする。

「ああ。魔法じゃない。そんなことよりも、ここにいたらまずい。さっきの奴らが戻ってくるかもしれないし、別の奴らがいるかもしれない。君たち家はどこ？よかったら送ってくけど。さっきのみたいなのがいないとも限らないし。」

「それが……無くなってしまいました。」

2人はうつむいてしまった。どうやら戦争で失ったようだった。

「じゃあ、行くあては？それが行きたいところは？」

という問いかけに帰ってきたのは首を横に振るしぐさだった。
このままじゃちが明かない。

どうしたもんかと悩みながらリンゴをまた一口齧る。

「しょうがない。とりあえず俺について来てくれないか？」

数分後、補給地点

「ケーニツヒさん。これは、いったい何ですか？」

ついさつき、補給地点へと戻ってきた。ここまで来るまでの時間で2人と少し話をすることができた。2人は予想通り姉妹だったらしい。

姉の名前は『ノエル・ライレイン』

妹は『シャルロット・ライレイン』

呼ぶときは『シャル』と呼んでほしいそうだ。

何でも、あの城から逃げてきたのだが待ち伏せされてしまったということらしい。

俺が勝手に考えていた展開とは結構違っていた。

なにせ、現代戦において戦場に一般人、それも女性はいないことが多いからな（テロなどは違うが）。巻き込まれたものとはかり思ってしまった。

ちなみにあのリンゴはここに来るまでに食べ終わって適当に捨てた。

「コートでいいよ、ノエル。それはヘリコプター。『UH-60』

通称・ブラックホークだ。」

ノエルが驚きの表情で見ていたヘリコプターについて答える。

『UH-60』通称・ブラックホーク。

この機体は、多目的用ヘリコプターとして作られ輸送から強襲、偵察などなど。種類によっては対潜用のものもある。

黒い機体に4枚のメインローター。定員は11名程度。頑張ればあと2名ほど乗れるかも知れない。だが、上層部の嫌がらせか何か知らないが俺は任務に1人で放り出されることが多い。なので、座席をいくつか取り外し弾薬や武器を入れられるようにした。結果的に、座れる座席は4つだけになってしまっている。

武装は俺の趣味で『GAU-19』を2つ取り付けている。

『GAU-19』

これは3本の砲身を持つガトリングガンだ。口径はデザートイーグル50AEと同じ50口径だが、こちらに使うのは12.7×99mm NATO弾で、違う銃弾を使う。銃弾は違えどもかなりの威力があるので、どんな状況でも対処することができる。

ただ、人間の体を真つ二つにするほどの威力のある銃弾を毎分1000〜2000発撃ち込むので、周りからはオーバーキルだといわれることが多いというのが問題点だ。

「ねえ、ユート。へりこぶたーって、何なの？」

近くで、きよろきよろと周りを見渡していたシャルが顔をこちらに向けて尋ねてきた。

「そこからか。まあ、当然だよな。……………うーんと、そうだな。輸送用の機械……道具とでも思っておいてくれればいいよ。」

いい説明の仕方がわからなかったので大雑把に答えておく。
「へえ。」

感心したように声を上げて、UH-60を見ている。

おっと、そんなことよりも、急いで荷物を積み込まなければならぬ。この補給地点にはUH-60以外にもいろいろなもの置いてある。

まず、武器だ。俺の任務は敵要人の暗殺だったり、敵基地への強襲だったりするので種類が多い。デザートイーグル50AEのような拳銃から、アサルトライフル。サブマシンガンや、狙撃銃などがいくつもある。そして、それらの銃弾が入った弾薬箱。これはヘリの中に積んである。一応武器は銃弾の互換性のあるものを優先的に選んではいるが9mmパラベラム弾や、7.62mm NATO弾。そして、先ほどの12.7x99mm NATO弾や、デザートイーグル50AE用の50AE弾など、種類が多く量もそれなりにあるので大変だったりする。

手りゅう弾やC-4プラスチック爆弾などもある。

そして、ガソリンを入れたポリタンクだ。いちいち基地に戻れないのでいくつか持参していかないと、すぐにガソリンがなくなってしまう。

ヘリの中に入っているものもあるが、一部はそこらへんに散らばっているのを整理しつつ元の場所へ戻しているのだ。

とりあえず、一番近くにあった「M82A1」を手取る。

「M82A1」

これは、対物ライフルといわれる狙撃銃だ。GAU-19と同じ12.7x99mm NATO弾を使う大口径の狙撃銃で、1.5キロ先の人間を真つ二つにすることができるとはこれのことだ。

一挺約90万円もする高価な銃である。

セーフティー（安全装置）が掛かっているのを確認してヘリの元後部座席のところにあるケースの中に入れ弾薬箱の上に積み上げる。

「ねえねえ、今の棒って何？何をするためのもの？」

ヘリから出て次の作業に移ろうとすると、コートの袖をシャルにつかまれた。普段見慣れないものばかりだから興味がわくのだろう。

「今のはね、狙撃銃っていう武器だよ。敵を遠距離から攻撃するのに適しているんだけど、詳しくはまた今度ね。今は急がないといけないから。」

「はい。今度ちゃんと教えてね！」

質問に答え、急いでいることを伝えたとシャルは袖から手を離してノエルのほうへ歩いて行った。

いい子だなあ。俺の周りの女と言ったら、出世のために腹黒い奴ばっかだったから、2人のように素直な反応には癒される。ここ数か月にわたる任務のストレスが薄れていくような気がした。

それからすぐに周りの装備を全部ヘリの中に積むことができた。不要なごみを一か所に集め、ライターで火をつける。

それを見て2人が魔法だと言っていたが、これはそういう道具なんだと説明しておいた。

長くとどまっただけでも状況が悪くなることしかないので早く出発するに限る。

「2人とも、乗って！」

そう言つて2人を促したのだが、どうすればいいのかわからないという顔をしている。

そつだ。この世界にはへりなんてものはないんだつた。乗れと言われてもわかるはずがない。

「ああ、そつだつた。2人ともこつちに来てくれるかな?」

ひとまず先にへりに乗り込み、2人に向かって手招きする。

「分かりました。」

ノエルが答えて、こちらに歩いてきた。シャルは後ろに続いている。

「こつち、段差に注意して乗り込んでくれる?」

2人が入りやすいように操縦席側に少し移動する。2人ともスムーズにはいかなかったが何とか乗ることができた。

「じゃあ、ノエルは奥に。シャルはこの席に座つて。……シートベルトは………できるわけないか。ちよつとごめん。」

そつ断つて、席に着いたノエルに近づく。

「えつ、あの、いったい何を?」

「動かないでくれる。やりづらくなるから。」

手を伸ばして、座席の右肩についているシートベルトを引き出す。そして左下の固定装置に取り付ける。

「うん。これでよしと。……ノエル、どうかした？苦しいのか？」

次にシャルのシートベルトを締めようとノエルから離れると、彼女は顔を真っ赤にしていた。

「い、いえ。苦しくはないです。大丈夫です！」

不自然な受け答えだが、苦しくないというのは本当のようなのでシャルのほうへ近づく。

同じようにシートベルトを締める。

「苦しくないかい？」

「うん！全然苦しくないよ。ねっ、お・ね・え・ちゃん！」

「ちょっと、シャル！？」

同意を求められたノエルはまたもや顔を赤く染めていた。

「まあ、苦しくないならいいんだが。俺がいつまで外さないでくれよ。危ないからな。」

2人に注意しつつヘリのドアを閉める。そして、操縦席に着く。エンジンを起動させ、離陸の準備をする。

「な、何！？この音。」

音。エンジン音のことを言っているのだろう。

「心配しなくてもいいよ、シャル。ちょっとうるさいけど何の問題もないから。」

安心させようと話しかけながらも準備を続けていく。すぐに準備が終わった。

「びっくりするかもしれないけど、危険はないからね。窓の外でも眺めてみるといいよ。」

操縦桿を握りしめ、上昇させる。すぐに機体は地面を離れ、森の上空に到達する。

「と、飛んでいるんですか!？」

後ろの席からノエルの驚いた声が聞こえる。

「ああ。でも驚くのはまだ早いぞ。」

そう言って操縦桿を操作し機体を前進させる。

「そんな、移動までできるなんて。」

「それにすつごく速いよ、お姉ちゃん!」

ノエルの驚きの声と、シャルの興奮した声が聞こえる。

「とりあえず、ここから離れてどこか安全な場所まで行こう。それから今後のことを離せばいいさ。」

とりあえず機体の前方、東に進路を取り安全な場所を目指してへり

を飛ばすことにした。

離陸と逃避（後書き）

まず、この話を楽しみにしてくれている方々（いるといいな）、読んでくれている方々。遅くなつてすいません。そして毎日投稿しないなんて書いてすいません。

友人からも怒られました。

7日の時点では毎日投稿したいと思っていたのは本当です。

ですが、入学式やらテストやら部活やら追試やら、いろいろあつたんです。登下校には自転車で40分以上かかりますし、課題もたくさん。部活も遅くまであるので帰れるのは8〜9時。

それから課題をして・・・となると、終わるのが1時くらい。疲れているのでそのままボタン。という生活がここ何週間が続いています。言い訳ですね、すいません。

そんなわけで毎日投稿は無理と判断し、週1で投稿しようと思います。なるべく時間があれば投稿しようと思いますが、基本週1です。

これからこの作品をよろしく願います。

ノエルの秘密

2時間後、魔王の城から東へ400キロほどの森の上空

離陸から二時間が経過し、太陽は地平線に沈もうとしていた。眼下に広がる森は城の周りにあったものとは違いベトナムのジャングルを連想させるようなうっそうとしたものに変わっていた。途中、いくつか町の近くを飛んだのだが人々がこちらを確認して逃げ惑っていたので着陸はしなかった。近くに着陸して徒歩で町へ行くことも考えたのだが、

「すう・・・すう。」

ノエルとシャルが寝てしまったのでやめた。普通はこの騒がしいローター音のせいでなれるまでは眠れないのだが、気にならないほどに疲れていたようだった。戦場になる城にいたらしいし、精神的に疲れがたまっただろう。

二人はより添うように眠っていた。何とも癒される光景である。

しかし、夜間に飛び続けると少なからず危険だし、きちんと休めないからそろそろどこかに着陸しないと。

と、20分ほど前から考えてはいるのだが、ヘリが着陸できるほどひろい場所がない。

だが、前方に湖らしきものが見えてきた。直径5キロはありそうなくらい広い。それに周りには着陸できるスペースがありそうだった。

ほどなくして湖上空に到達。ホバリングをして二人を起こさないよう慎重に着陸させる。努力の結果、着陸の衝撃はあまりなく今までで最高の着陸ができた。

エンジンを切りると、ローターがゆっくりと止まる。といっても時間が少しかかったが。

湖は美しく、夕陽に照らされてオレンジ色に染まっていた。周りの森とは違い湖の周りは過ごしやすそうな感じだ。ほんの少し見とれてしまったがすぐに目をそらした。オレンジ色が炎を思い出させる。

「すう・・・すう。」

二人はまだ安らかな寝息を立てている。起こすのが悪いような気もするがノエルの肩をつかんでゆすった。

「ノエル、起きろ。着陸したぞ。」

声をかけつつ肩を揺らしているのだが、反応が薄い。

「うん・・・もうそんなに・・・。食材が・・・無駄になってしまいます・・・。」

何か、食べている夢でも見ているのだろうか。反応が薄いのでノエルは後にしてシャルを先に起こすことにする。

「シャル、起きてくれ。もう地上だぞ。」

ノエルと同じように肩をゆする。すると、瞼が震えて開いた。

「ほえ・・・。あつユート。おはよう。」

まだ、寝ぼけているようで、何度も瞬きを繰り返すシャル。

「おはよう。っていつても今は夕方だけだな。」

俺の言葉を聞いてシャルが外を見る。

「ほら、シャルも起きたんだから起きろ。ノエル、起きてくれ。」

ノエルの肩をまたゆするが、全然起きる気配がない。

「あつ、任せて。お姉ちゃんを起こすのはちょっとコツがいるんだよ。」

シャルがシートベルトを自分ではずして横から話しかけてきた。
もう寝ぼけてはいないようだった。

「じゃあ、頼むよ。」

少し下がってシャルに場所を譲る。

シャルはノエルの前に行くと、彼女の耳に顔を近づけた。

「お姉ちゃん。また、おもらししてる！早く隠さないと、怒られちゃうよ！」

思いもしないセリフだったので、思わず目を見開く。

こんなことを言っても起きるわけがないだろうし、これじゃあノエルがまだおもらししてるみたいじゃないか。

「ふえええ！そんなあ、昨日はちゃんと済ませたはずなのに。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

様子を見る限り、まだしているようだった。

「あ・・・・。」

幼い子供を見るような目でノエルを見ているとようやく目があつた。先ほどまではパニックになっていて少し顔が赤かったが、目があつた瞬間にトマトのように真っ赤になってしまった。なんといいのかわからずに動けずにいると、視界の端でシャルが笑いをこらえている姿が見えた。

「・・・・・・・・まあ、そういうのは個人差があるから気にしないほうがいいとおもうぞ。気を落とすことないさ。」

慰めるために言葉を選んだのだがノエルの目元には涙が滲んでくる。女性に泣かれることなどあまりなかったたので戸惑ってしまう。

「あははは！」

そんな俺たちを見てシャルが大きな声を上げて笑う。

湖の周りには彼女の声だけが響き渡っていた。

ノエルの秘密（後書き）

昨日、更新するつもりが書いている途中で寝てしまった。
なので朝になりました。
すみません。

再び・・・

ピーピーピーピー。

しばらくしてヘリから緊急用のアラームが聞こえた。
ここは異世界。このアラームを使えるのはあいつしかない。いろいろあつてすっかり忘れていた。

「シャル、ヘリからPC・・・四角くて黒色の薄いやつを取ってきてくれないか。俺が座っていた隣の席にあるはずだ。この音はほつておいておいていいから。」

「分かった。取ってくるね！」

アラームに驚いていたシャルに頼む。自分で取りに行ったほうがアラームも消せるしいいのだができない理由があった。

「あ・・・う・・・」

腕の中で顔を赤くして固まっているノエルが原因だった。

まだおもらしをしているということが俺にばれた後、ノエルは俺の必死の努力によって泣きはしなかったものの俺と一緒にいることに耐えられなくなったらしくヘリを飛び出し森の中に逃げようとしたのだ。

普通ならば放っておくのだがここは見知らぬ森の中。しかも奥深く。何か不測の事態が起こるかも知れなかったので追いかけて捕まえ、外に出ていたシャルのところまで引っ張ってきた。

そしてノエルに理由を説明しつつ手を離れたのだが、またすぐに逃げようとしたので後ろから抱きついて止めた。

そうしたらノエルは足に力が入らなくなったらしく自力で立てなくなり、同時に呆けてしまった。

放っておくわけにもいかず、シャルに任せると逃げられる可能性もあったので俺が介抱していたのだ。

「これでいいの？」

さっきの出来事を思い出しているとシャルがPCを持って戻ってきた。

「ああ、これでいいよ。ありがとなシャル。」

「えへへ。ほめられちゃった。・・・ていうかお姉ちゃん！そろそろユートから離れてよ！」

「・・・ふえ？」

「ほぐら。早く！」

引っ張られていくノエルとシャルを見ながらPCを開く。

予想通り自称オペレーターが画面に映っていた。

「やっと出てくれたね。いや、まだ間に合うかな。大丈夫かな？」

前の時と同じでジャージ姿だったが少し困った表情をしている。

「なんですか！？今、男の人の声が聞こえましたよ！」

いつの間にか復活していたノエルが驚いて周りを見渡していた。

「あ！ユートの持つてるものに男の人が映ってるよ、お姉ちゃん。」

シャルが画面の自称オペレーターに気付いて後ろから画面を覗き込んできた。

「本当です。板に男の人が映ってます。」

ノエルも続いて覗き込んでくる。

二人の顔を見た瞬間に自称オペレーターの表情が変わる。

「な〜んだ、もう保護してたのか。心配して損しちゃったな〜。」

少しつまらなそうな表情でしゃべる自称オペレーター。

「ユート、この人だね？知り合い？」

シャルが興味津々といった顔で聞いてくる。なので俺は正直に・・・

「いや、全然知らないやつだ。」

と答えた。

「いやいや、確かに今日初めて会ったし名前も教えてないけどそん

な言い方しますかね、普通。・・・ま、ちょうどいいから自己紹介しておきましょう。『ザック』って名前です。どろぞよろしく。」

自称オペレーター改めザックは画面の中で頭を下げた。

「ザックさんですか。私はノエルといいます。」

「シャルロットだよ。シャルって呼んでね！」

ザックの自己紹介に対して二人が答える。律儀に答える必要性はないような気がするのだが。

「さてと、この世界についての説明がまだ終わってなかったよね。とりあえず説明するから質問は最後にしてね。」

それからザックによるこの世界についての説明が始まった。

世界について

ここは魔法の存在する世界でアフリカ大陸ほどの大きさの大陸『メノウス大陸』が一つあるくらいの小さな世界。海対陸の割合が4対6というほど小さい。メノウス大陸は中央に大きな湖がありその湖を囲むように陸地があり、その外側を海が囲んでいるという感じになっている。海や湖にはいくつかの島が浮かんでおり、その中でも大きな島には国ができています。

この世界には人だけでなく魔人や魔物が存在し、科学力は中世ヨ

ロッパほど。魔法が存在し、誰でも使えるが力の大きさは素質で決まる。

人と魔人の違いは魔力の大きさや髪などの色くらいで肉体構造は大きく変わらない。

けれども、人と魔人の仲は地域によって異なる。特に南部では魔人の数が少なくあまり理解されていないので人が魔人を怖がっていて戦を仕掛けていたりする。

人も魔人も大陸全土に住んでいる。北部はいくつかの国々が集まって魔国が。南部には人だけの国がある。また、中央の湖に浮かぶ一番大きな島には魔人と人がほかの国の干渉をほとんど受けずに暮らしている。

ギルドと呼ばれるものがあり、そこで依頼をこなせば報酬をもらえる。人とか、魔人とか関係なく登録できるが種族によって報酬金額が少し変わる。

現在、南部のノイリアスという国で勇者が召喚され、人だけの国で魔人排斥の機運が高まり魔人排斥同盟が結成され、魔国に対して同盟軍が戦を仕掛けた。

勇者の力が強かったことと、魔国の首都のあるサラビエラ王国が東部の少し南と近い位置にあったので、同盟軍は一気に進撃し魔王の城へ攻撃した。

城は陥落。

魔王は勇者に深手を負わせたものの死亡した。勇者は回復魔法によって傷を癒やしている最中らしい。

そして、ノエルとシャルは魔王の娘だということだ。

「やはり、お父様は・・・。」

話を聞いてノエルとシャルは落ち込んでいた。事前に知っていたようだが信じ切れていなかったようだ。

二人はそっとしておいて俺はザックに聞きたいことがあった。

「この世界についてはわかった。俺をこの世界に呼んだ理由は？目的は？」

再び・・・（後書き）

まだこのサイトの機能を十分に使いこなせていません。

この機能を使ってみては？

などのコメントは大歓迎ですのでできれば感想をお願いします。
質問なども歓迎です。

こんな作品ですが楽しいと感じてくれればありがたいです。

ザックの話（前書き）

気づいたら五ヶ月も・・・・・・・・orz

しかも最後がグダグダな気が・・・

ザックの話

「この世界についてはわかった。俺をこの世界に呼んだ理由は？目的は？」

「そゝだねゝ、目的は簡単。この世界を破滅から救ってもらうためだねゝ」

ザックの言葉で落ち込んでいた二人の顔が驚きに変わる。

そのままザックはこちらに口を挟ませることなく話し始める。

「驚くのも無理はないと思うけど。……んゝ、この世界にあんたが介入しなかったらっていうもしもの話をしよゝか」

サラビエラ王国の魔王が死に、その娘二人が勇者の手に落ちる。その結果、同盟軍は調子づき北上政策を開始。初めは同盟軍VS一国という形だったので、同盟軍が躍進を続ける。しかし、何か国かが落とされ、魔人が非道な扱いを受けていることに反対した残りすべての魔国が、そして同調した人と魔人の混成国（以下混成国）が連合軍をつくり全面戦争へと発展。数年の歳月を経て連合軍は同盟軍を南へ押し戻すことに成功。さらに南下を続けノイリアスを残し同盟国は制圧される。

追い詰められた勇者と同盟軍は狂気の沙汰を起こす。

開発されていた魔力増幅器を使って連合軍を巻き込み自爆。
その爆発の影響で世界が不安定になり、十数年で世界が崩壊し始める。

ザックの話はこんな感じだった。

「と、言う感じでこの世界は滅ぶはずだったんだけどね。前に言った神……まあ、正確には神よりも偉くて、まったく神らしくない人がとある人のためにこの世界に干渉してるんだ。ちなみにあなたを選んだのもその人だよ」

へらへらしながらおどけて話しながらも少し興味のなさそうな顔でザックはそばに置いていたと思われる缶コーヒーを飲んだ。

「その神より偉い人ってのは誰だ？それに誰のために干渉してるんだ？」

説明が随分と適当なのでほかにも疑問が浮かび上がってくる。その疑問の中でも特に気になることをまず口にした。

「これは……ん、まあ話しても大丈夫かな」

ザックは少し悩んだように首をひねったが、すぐにこちらに向き直った。

「詳しいことは省いて、尚且つわかりやすいように話すから実際には異なる部分もあるって理解しておいてね。まず、神様よりも偉い人っていうのは、分かりやすいように神と比較してるけど全くの別物でね、簡単に言うと僕みたいな、数多の世界に干渉できるもののことなんだよね。でも、神様っていうのは限られた一つから三

つ以内の世界にしか干渉できない存在のこと。だから、あんたたちの言う神様とかとは全く似ても似つかないってわけ。で、今回あんたを選んだのは僕の上司みたいな人。でもって、その人は思い人が記録するのに慣れるために書きやすい世界を選んだらこの世界になったってことだね」

一旦話を止めたザックは先ほどの缶コーヒーを飲み、言葉をつづけた。

「ちなみにその人がなぜ君を選んだのかっていうと、僕たちみたいな存在の中で一番偉い人、もとい一番強い人の若いころに容姿も性格も名前も一緒だったかららしいよ。その人が言うにはあんたはね、かの人の劣化版って感じらしいよ」

人のことを劣化版と呼んでおきながらへらへらした態度を崩さないザック。

さすがにいらつときたので反論しようかとも思ったが先にノエルが行動していた。

「ユートさんを劣化版なんて……それに、今の話を聞く限りその人はこの世界が破滅しても別によかったと……そんな印象を受けましたか……」

丁寧な口調は変わりこそしないもののその声は至極冷たく、周囲に殺気を振りまいていた。

「おお、さすがは魔王の娘。大した気迫だねえ。ちょっとビックリしちゃったなあ」

ザックは缶コーヒーの残りを一気にあおるとそれをどこかに投げた。

カラン！……カラツ！カラカラ。

「僕としてもひどい話だとは思ってる。けど、君たちが想像しているよりもはるかに世界は多いんだ。すべてを救えるわけでもなければ、望まれてもないんだ。僕の力ではどうすることもできないし、できるかもしれない上司は今、思い人にしか興味がなくなってる」

最初のほうは悲しそうに、真剣に話していたザックだったが途中から元のへらへらした様子に戻ってしまった。

「いや、あの様子を見るまではあの人が生物学的に見て女なんて信じられ……」

カ
ン。

気持ちのいい高い音がPCのスピーカーから響き渡る。と、同時にザックは画面から消えていた。

そして、地面をのたうちまわっているような音が聞こえてくる。

「あら、ザックはそんな風に思っていたの。新参者のくせに……少し調教が必要かしら。フフフッ」

画面から聞こえてきたのは女性の声だった。すぐにのた打ち回る音が消える。

「ユ、ユーノさん！？なんでこんなところに！？」

ザックの声が聞こえるが、先ほどとは打って変わり恐怖している声だった。

「大丈夫。すぐにそんなこと気にならなくなる……フフッ」

「ちよっ、待ってくだ……ギャアアアアア！」

画面を誰かが通り過ぎていく。次の瞬間にザックの悲鳴が聞こえ、接続が切れた。
訪れる静寂。

1分もたたないうちにまた通信がつながり、ボロボロになったザックが画面に現れた。

「ひ、ひどい目にあった」

結局のところ、ノエルは怒りの矛を収めてくれた。ザックのボロボロな姿を見て同情したというのが大きかったようだ。それにザック自身が何度も何度も謝っていったのもあるだろうが。

ザックはへらへらした態度をやめ（というよりは先ほどの恐怖を引きずっていたようだ）簡潔に要件を話すと接続を切ってしまった。

内容は6つ。

1つ、弾薬などの補給物資、または武器は要請さえすれば用意してくれるということ（ただ補給には一定期間、間をあけるそうだ）

2つ、金や食料は自分で調達してほしいとのこと

3つ、情報も要請されれば伝えてくれるがすべての情報を伝えられ

るわけではないとのこと

4つ、世界が崩壊しないように行動してくれれば自由にしていよいとのこと

5つ、ヘリの操縦については非常時の場合（戦闘中やユートが操縦できないなど）ザックのほうで操縦してくれるとのこと

6つ、それ以外は基本的に干渉しないとのこと

これで補給についての心配はなくなった。何せ基地に一人で突っ込んだから一部の弾薬が結構少なくなっていたのだ。

さすがに前にいた世界のように一日に三分の一を消費することはないだろうが一番よく使う7・62ミリが無くなるのは痛いものがある。

確か、あれはアフガンだったか。一度持っていた7・62ミリが切れてスナイパーライフルとハンドガンだけで敵基地を制圧しなきゃならんことがあったがあれはきつかった。

超近距離で敵と遭遇した時に手にあったのはスナイパーライフル。銃剣取り付けておかなかつたら死んでたな。

ちなみに7・62ミリ弾は敵がよく使うので戦場で調達することも可能ではあるが、その時は運悪く正規品ではなくパチ物の銃弾だったために装填して何発かで暴発してしまった。腰だめで撃ついたので大事には至らなかつたがひどい目にあつた。銃のほうも一緒のようで危険だったので調達できなかったのだ。

チョンチョン

「んっ？」

昔の任務を思い出していると肩をノエルに突っつかれた。

「ユートさんはこれからどうするおつもりですか？世界を救うにしても何をするにしても計画は必要だと思いますけど」

ふむ、それもそうか。

さっきの情報から考えて思いつく案はいくつかある。

1つ、勇者暗殺。

危険度中

メリット・すぐに終わる。

デメリット・残った同盟軍の行動に不安要素がある。

2つ、同盟軍の排除。

危険度大

メリット・同盟軍が自爆することはない。

デメリット・労力が大きい。

3つ、同盟軍が追いつめられるまで放置。

危険度小

メリット・一番楽。

デメリット・魔人と人との関係に問題が生じる可能性あり。

1つ目は俺が一人で敵の本拠地に行つて銃弾を一発放てば終わる。だが、勇者を失つても結局破滅への道を進む可能性がある。

2つ目はかなり危険だ。さっきの戦場には15万くらいの人がいた。単純に2で割つたとしても7万5千は同盟軍。実際はもつというだろうし、本国のほうにも防衛部隊が残っているはずだ。ということ

はかなりの人数を相手にしなくてはいけないことになる。いくら銃が多対少において効果を発揮するといつてもその数には限度がある。まして1対数万は許容範囲を数倍も越えている。

だが、破滅への要因を消すことができるので破滅を免れることができる。

3つ目は最も安全で楽な方法。同盟軍が連合軍にボロボロにされた後に殲滅すればいい話だ。自爆するくらいだからかなりの兵力を失つた後だと思われる。殲滅するくらいなら一人でも、最悪でも連合軍に協力すれば簡単に終わるだろう。

しかし、同盟軍の行動のせいで魔人と人との関係が悪くなり、将来的に同じことを繰り返す可能性がある。

この考えを二人に話してみたのだが、あまり受け入れられなかった。確かにこの三つは自分を中心にリスクを考慮して考えた案だ。最善の策ではないのだし、その間の犠牲もそのあとの犠牲も考慮していない。

特に二人は魔人への迫害をどうにかしたい様子である。

ならば、今思いつく最善の策は……。

「同盟軍の妨害なんてどうでしょう？」

ノエルがふと思いついたように口を開いた。

「同盟軍を自爆させるまでに追い詰めるということは両者の間に大きな憎悪が生まれたということでしょう。なら、その憎悪を軽減し全面戦争にならないように妨害をする。そうすれば連合国は同盟国の首都に攻め込むこともなくなるかもしれません。それに、魔人たちを助けることにもつながります。」

確かにそれが今思いつく最善の策かもしれないが、負担が大きいい。何せ、情報を集め同盟軍の動きを先に予測し、行動し敵を排除。

言うだけなら簡単のように聞こえるかもしれないが、そんなことはない。

情報は科学が発展した現代においても手に入りにくいものだ。

24時間体制で何人もの人材を投入しなければ正確な情報は得られない。

まして科学が進んでないこの世界でそんなことをするのは困難であり、情報に信憑性もない。

「だが、妨害するにしろ情報が必要だ。その情報はどうやって集める？ 仮に集められたとしても正確でなかった場合、妨害は最大限の効果を発揮できない」

「それなら、『遠見の魔法』があるよ。遠くにいる人の様子が分かるっていう魔法だよ。」

先ほどまで話についていけていなかったシャルがうれしそうに話す。話に加われなかったのが少し悲しかったのかもしれない。

「じゃあ、その『遠見の魔法』って言うのはどのくらい正確に様子がわかるんだ？」

問いかけに対してシャルは唇に人差し指を当てて答えてくれた。

「んつとね。魔力にもよるんだけど、ふつうの魔人ならその人の周り15メートルくらいでね、私やお姉ちゃんくらいなら50メートルくらいまで見えるよ」

対象の周り50メートルを正確に知ることができるのは確かに強みかもしれないが、位置情報まで知ることができるだろうか？50メートル以内に位置を特定できるものがなければ意味がない。ましてその場所を知らなければ使えないのではないだろうか。

「しかし、対象者の周りに濃霧などが発生していた場合や気づかれて『遮断の魔法』を使われてしまうと意味を成さなくなってしまう。相手はあの勇者ですから最初の一回で気づかれてしまう可能性が高いです」

ノエルの言葉で『遠見の魔法』とやらを使うわけにはいけなくなつた。一回しか使えない可能性があるのならば、今後もっと効果的な場面で使うべきだろう。

「それなら使えないな。でも負担は大きいけど効果も高いようだし基本方針はノエルの案でいこう。それにだいたい夜も更けてきたことだしまた明日にでも話し合うことにしよう」

この湖に着いたときには夕方だったのだが、今では空に星が多く輝いていた。月は出ていない。周りには風に吹かれた木々のざわめきだけがかすかに聞こえていた。

それから、三人で支給されていた軍用レーションを食べて眠りについた。

味のほうは……昔に比べればよくなっていたといっておこう。

ザックの話（後書き）

遅れてホントすいません。

理由は活動報告のほうにでも書いておきます。

いろいろとへんな設定が増えていますがあんまり話には影響のないものも多いので気にしないでください。

あと、かなりリアルが忙しいので週一投稿は無理と判断します。
時間が取れば連続で、取れなければ数ヶ月あく場合があるので
長に待ってくれるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1687s/>

魔王の娘と孤高の兵士

2011年10月8日13時35分発行